

「申京煥君を支える会」の記録（『むくげ通信』265号、201407.27、1～6頁）

―協定永住取得者初めての「強制送還」との闘い―

飛田雄一

●韓国から被爆者・孫振斗さんが

1970年代の運動は今や歴史学の対象となっているようだ。むくげの会ができたのが1971年1月で、もはや会も歴史学の対象？である。私は1971年から78年まで孫振斗さんを支援する活動に参加したが、最近若い研究者がその歴史を調査するというので持っている全資料をお渡しした。孫振斗さんは、1945年8月6日、広島で被爆した韓国人で、戦後、外国人登録令違反で韓国に強制送還された。その後、体調が悪く日本政府に原爆症の治療をもとめて日本（長崎県）に密入国したのである。孫振斗さんは治療に必要な原爆手帳の交付をもとめて裁判をおこし、地裁、高裁、最高裁（1978.3.30）で勝利したのである。



1974.3.30 読売新聞

●申京煥君が韓国に強制送還される？

私はまた、この孫振斗支援運動と時期的に重なる時期に申京煥裁判に係ることになった。この申京煥裁判ももはや歴史学の対象であろう。申京煥君を支える会は、1973年12月に作られ（当初は救う会、1974.2支える会に改称）、1978年9月11日裁判取り下げ、同年12月8日特別在留許可取得をへて、翌1979年3月10日のニュース最終号発行をもって終結したのである。最後の事務局メンバーは6名。日本人（川端諭、信長正義、飛田雄一）、朝鮮人（金元良、金成日、梁泰昊）だ。飛田は事務局長、信長さんは会計を担当していた。

申さんは、1948.1.15生まれ。1950.5.10生まれの私より2つ年上だがほぼ同年代。申京煥「君」という呼び方には違和感があったが、支援する側の年齢層から会の名前は申京煥君を支える会となったのは仕方がなかった。（このレポートでは、会の固有名詞では申京煥君、その他は、申京煥さんとする）

1965年3月、申さんは兵庫県立有馬高校をクラスでただひとり就職先も決まらぬまま卒業した。その後、親戚の土建業で働くが、不良仲間と強盗を働き、1968.5.14、静岡地裁で懲役8年の刑を受けた。見張り役であった申さんは、押しいったとき入口でトラブル時、怪我をした被害者に声をかけてタオル？を渡したことで人物特定がなされ、強盗致傷罪が成立したのである。この罪は強盗より罪が重い。1960年代後半の事件で、その後の時代であれば9名の仲間の日本人朝鮮人の罪の軽重などが問題となって、少年申京煥に対する量刑としては重すぎるということになったのではないと思う。

申さんは、刑務所では模範囚として過ごし、懲役8であったが6年半で1973.9.20岩国少年刑務所を出獄する。が、その6日前に退去強制令書が発布されたのである。韓国に行ったこともない申京煥さんが、韓国に強制送還されそうになったのである。私がこの運動に係るきっかけは、最終号ニュースの「雑感」に書いてあるのでご覧いただければと思う。（本レポート5頁に収録）

申京煥さんの強制送還事件が特に注目されたのは申さんが、1965年日韓条約にともなう日韓法的地位協定による新しい強制送還規定が、初めて適用される事件であった点だ。入管法では1年以上の刑を受けた外国人は強制送還されることになっているが、日韓法的地位協定による「協定永住」では、一般の外国人（協定永住を申請しなかった朝鮮人も含む）の1年で強制送還というのが7年とされたのである。協定永住取得者で8年の刑を受けた申さんがその強制送還可能性の第1号だったのである。申さんがそのまま強制送還されれば、日韓政府が一般外国人より優位だとされた協定永住が実際には協定永住を取得した韓国人にとって不安定は法的地位であることが明かになるという問題でもあり、その後7年を超える協定永住の韓国人が次々に強制送還されるということにもなるのである。

●裁判が始まる

裁判は、1974.1.25東京地裁で第1回公判が開かれた。その後、何回かの公判で原告側、国側から何度も準備書面が提出された。第10回公判1975.3.24では

大寿堂鼎、小田滋両氏の国際法からみた鑑定書が提出された。第12回公判1975.9.22では、少年時代の申さんを知る（宝塚で牧師をしていた）崔昌華さん、第13回公判1976.6.25では申さんの育った宝塚市ヨンコバの金泰浩さん、井熊一郎さんが証言した。第14回公判1976.8.26、第15回公判11.11では当時朝鮮研究所の佐藤勝巳さんが2回にわたって証言した。当時の佐藤さんは在日朝鮮人の法的地位問題の第一人者でももちろん私たちの主張を証人として補強したのである。

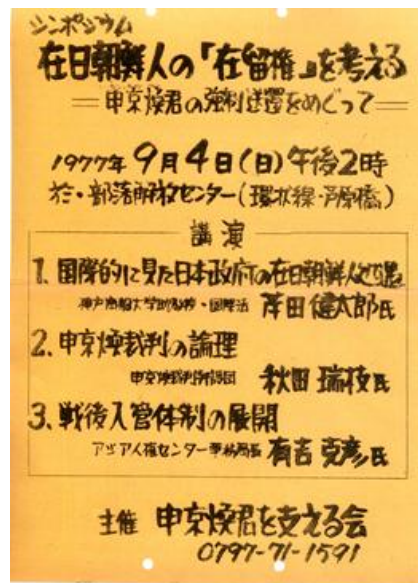
第16回公判1977.2.21では李仁夏さん、第17回公判4.27では申京煥さんの妹・点粉さん、母親の金弼連さんが第18回公判6.6では国際法学者・高野雄一さんが鑑定人として証言した。そして第20回公判12.5では申京煥さんと当時アジア人権センターの有吉克彦さんが証言した。第21回公判1978.2.14に最終準備書面を提出した。その後第22回公判6.13に裁判長の交代があり再開の形となったが、先に書いたように同年9.11訴訟を取り下げ、12.8に特別在留許可を得たのである。この9.11から12.8までの3か月間、本当に許可はでるのか、法務省にだまされるのではないだろうか、と、やきもきしたことを覚えている。

●講演会、シンポジウムなど

支える会では、当初毎週のように事務局会議を開いた。1976年末まで週1回ペースは続けられた。今から思うとものすごいハイペースで、会場は日本基督教団宝塚福井教会だ。会の代表をされていた川端諭さんが牧師を務めていた教会だ。

公開講演会も何回か開催している。1975.3.30には仙石弁護士（後の民主党議員）、同年11.22には田中宏さん、1976.2.22には李殷直さん、1977.4.16には、「シンポジウム・申京煥裁判」（東京）で中平健吉弁護士、河野敬弁護士、中村尚史さん、田中宏さん、同年5.18には西山要弁護士が講演してくださった。

1976年9月から12月にかけては、講演録第1集のところにポスターを掲載しているように姜在彦、金時鐘、曹基亨、佐藤勝巳の各氏が講演している。その後も、1977年9月には右のポスターのようなシンポジウムも開催している。



1977.12.5には金石範さん、1978.4.22には金東勲さんの講演会も開いた。（金石範さんの講演録はニュース21号に収録）1977.11.19には梁泰昊さん、1978.3.17佐藤勝巳さんなどだ。

●全国各地への運動の広がり

支える会の運動は宝塚が中心だったが、当時同時並行的に関わっていた朴鐘碩日立就職差別裁判

（1974.6.19勝訴判決）の集会等で申京煥君のアピールとすることも多く、この日立闘争と連動して全国にも支援の輪が広がっていった。1974.3.15には大阪のKCC会館で「支える会関西連絡会」（KCC，韓青同、韓学同、韓国青年会、東大阪反入管連絡会議、大阪市外教、韓国教会青年会、在日外国人の人権を守る会）が結成され、その後、全国ニュース3号（1976.5.15）によると以下のように関西連絡会、関東連絡会、東海連絡会、それに、仙台、広島、福岡、松江にグループができています。



●AB論争、そして「凍結」

そしてもうひとつ支える会の運動にとって大事件が起こっている。それはいわゆる「凍結問題」だ。それは、全国各地に支援グループができたが、宝塚以外のグループの活動を凍結させるというものだ。実は、有名な「AB論争」というのが1975.8.16～17の名古屋学生センターでの全国合宿から始まったのである。いまとなってはどちらがAでどちらがBだったか覚えていないくらいだが、全体状況を主命題と考えるか、個別（申京煥）状況を主命題と考えるかという論争だ。

全体状況を主と考える活動が申京煥君の在留資格取得に不利な条件をつくりだす可能性がでてきたの

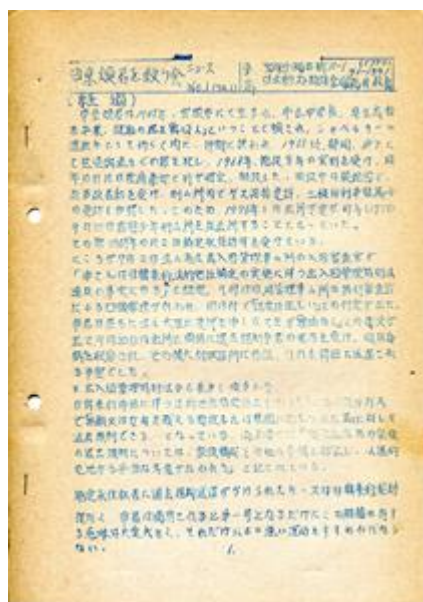
だ。1976.2.1に宝塚で全国会議、2.19にも緊急全国会議、2.29にも全国会議（東京）、7.17～18（名古屋）、7.31～8.1（東京）、8.25～26（東京）と全国会議が開かれ、ついに同年 9.18 神戸での全国会議で「宝塚以外の支える会の活動を凍結する」ことが決定されたのである。いや、ほんとに熾烈な論争であったが、つまらない論争でもあった。私自身が 70 年前後のベ平連運動のなかで政治党派から「いま××に参加しないのは反動・反革命である」と言われて、「いやいや△△も大事でしょう、あなた方はその△△に取り組むんですか」といちおう言い返しておいて、組織防衛（？）を果たしてきた論争とまあ同じようなものだ。でももしこの A B 論争に敗れていたなら、申君の特別在留資格取得は難しかったと思う。同年 1976.10.25 に『凍結』に至る経過報告」を全国に発送して凍結が完了したのである。（この経過報告文書は、B 4、4 枚？のものが、実はそれが見当たらない。保存されている方は至急飛田まで連絡願いたい。）

●支える会の出版物

支える会は、多くのニュース、資料集、講演録を発行した。以下、その記録である。※印の資料は在庫があるので希望者には無料でお送りする。郵便振替＜01150-4-43074 飛田雄一＞に 100 円を送金すればその住所に送付。ニュースは、近々に PDF ファイルにしてデータとして提供できるようにしたいと考えている。

◆ニュース（宝塚）

1 号、1974.1



※当時はガリ切印刷。印刷技術にたけていても印刷枚数に制限がある。1 号は、4 頁のもので大量に印刷したので、上のガリは福井教会のメンバーでもあった初版の I さんのもの、飛田が同内容の 2 版をつくった。

2 号、1974.3.24

3 号、1974.5.19

4 号、1974.6.23

5 号、1974.7.28

6 号、1974.10.6

7 号、1974.11.23

8 号、1975.2.2

9 号、1975.3.23

10 号、1975.5.5

11 号、1975.6.28

12 号、1975.9.28

13 号、1975.11.22

14 号、1976.10.17

15 号、1976.12.10

16 号、1977.4.3

17 号、1977.5.20

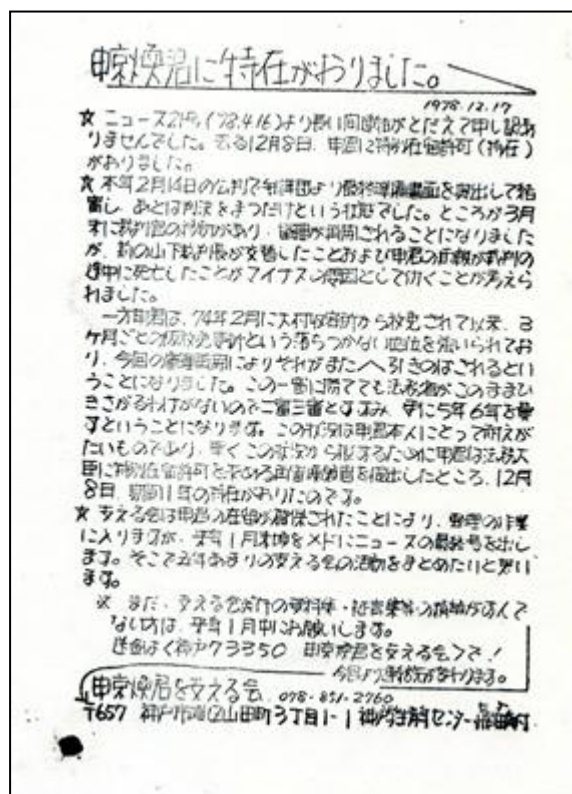
18 号、1977.7.31

19 号、1977.10.26

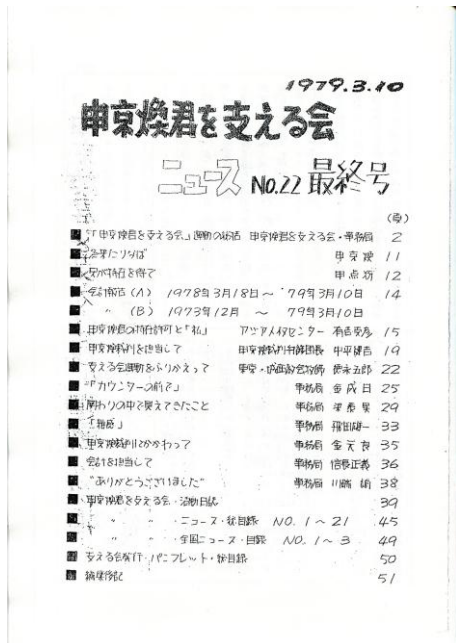
20 号、1978.1.22

21 号、1978.4.16（金石範講演録「朝鮮人が日本で生きるということ」1977.12.5 ほか）

ハガキニュース（特在がおりました）、1978.12.17



22 号（最終号）、1979.3.10



※2～3 頁はこの文章 6 頁に収録。

◆ニュース（全国連絡会のニュース）

1 号、10 頁、1975.12.15



2 号、14 頁、1976.2.1

3 号、12 頁、1976.5.15

◆資料集

1 号、68 頁、1974.2（12.8 東京集会基調報告、申京煥君の手紙、申点粉さんの嘆願書、基督教青年会アピール、日韓キリスト教指導者の要望書ほか）



2 号※、37 頁、1976.1（3.30 集会報告集）

3 号、25 頁、1975.3（申京煥発言集）

4 号、55 頁、1796.5（訴状、被告国準備書面、大寿堂鼎、小田滋鑑定書ほか）

◆証言集

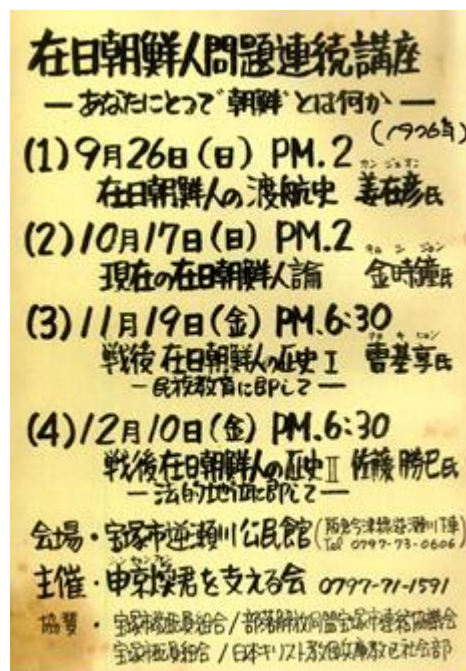
1 集、96 頁、1977.4（崔昌華、金泰浩、井熊一郎、佐藤勝巳（上、下））

2 集※、42 頁、1977.7（李仁夏、金弼連、申点粉）

3 集※、25 頁、1978.4（申京煥、有吉克彦）

◆講演録

1 集、102 頁、1976.11、在日朝鮮人の日本渡航史 姜在彦（同『在日朝鮮人渡航史』を再録）



2 集、42 頁、1977.8、金時鐘、佐藤勝巳、曹基亨

◆その他

・聞き書き集、47 頁、1976.1

・学習資料、大寿堂鼎「旧属領民の退去強制」

- ・ 学習資料、高野雄一「鑑定書」
- ・ 仙台・申京煥君を支える会「4・18講演集会特集号（李殷直）特集号」、1976.6、16頁



申京煥君を支える会ニュース 22 号
(最終号、33～34 頁、1979.3.10) →

●さて、活動資金は？

申京煥裁判は、弁護士が手弁当でかかわってくださったことにより財政的にどうにか進めることができた。以下は、支える会全期間の会計報告である（ニュース最終号収録）。当時のお金で 555 万円の収入、支出なので多くの支援者に支えられて運動が進められたことになる。最終の会計担当は信長正義さん、ガリ版は飛田のものである。むくげ通信編集後記の飛田の字は、きたない、乱暴、ヘンとツクリが離れていて読みにくい・・・と不評だが、当時は結構きれいな字を書いていたようだ。

35 年後の活動記録としては不十分なもののだが、以上、総まとめの記録とする。

会計報告(B) (1973.12 ~ '79.3.10)			
収 入		支 出	
会費	1,233,550	公判費用	1,543,555
一般カンパ	225,797	印刷費	2,174,306
特設カンパ	823,815	通信費	820,787
海外売上 移転収入	1,242,009	講演料 移動費	611,840
		会議及事務費	373,539
		雑費	33,325
		(小計)	5,557,352
		残高	0
合計	5,557,352	合計	5,557,352

雑感

飛田雄一

昨年12月に存在がなくなり、ようやく申京煥事件が終結し、感無量の思いだ。申君や申君の家族に接してきただけに「よかったなあ」という感慨は大きいものがある。

私とこの事件との最初の関わりは73年の10月頃だ。宝塚福井教会の川端先生から、京都の飯沼二郎先生の紹介で、いふことで電話があり、とにかく福井教会へおかけして、「ばば」である。大変だ、大変だ、という時期だった。当時、私が比較的入管問題に詳しいということと、関曲在住の弁護士の方に電話で申君事件の事情を説明したりした。お金の問題等で行き詰まっていた時に、中平弁護士がひきうけて「おれ」の「おれ」は、裁判は神速に進んでいった。

(34)

私はその後しばらくぶりにして、74年2月より、事務局会議が定例化され、その際より又事務局へ顔を出すようになった。当時、他の事件にもかかわっていた関係で、毎週の会議に参加するのも大変だった。たいてい力ソコをつけて「二週間」一回、相談役的に参加し、しゃべり、言った。ところが、なかなかやるとする事がいっぱいあり、また事務局にたづねたこともあって知らないままに事務局長に昇格し、毎週、神戸から宝塚に帰るようになった。以後五ヶ月、本当にいろいろなことがあったが、すべて良い休養であった。思いつくままに書いてみる。

☆支える会の運動の中で多くの朝鮮人・日本人の友人ができた。朝鮮人とは当初、相対に連帯などがあつた。いづつ、いづつに共同作業を進めるうちにやれもむくむく仲間となりえた。良い財産ができたと思ふ。

☆「私達朝鮮人は自分のことだから申君の運動を最後までやるが、日本人は何故かかわるのか」というようなことをよく聞いたがあまり関係ないようである。つまり日本人もいれはやらない日本人もいるし、やる朝鮮人もいれはやらない

朝鮮人もいるのである。あんなにやるべきなのに、右の主体性の問題である。

☆運動の過半は難航であることが認識していたが、まことにそのとおりであった。その際、事務局には多様な人がいてうまく分けてきたと思ふ。また、夜おやまでニュース等の発送を手伝ってくれたむくげ通信会のメンバー、また、あて名印刷用のカードができたまで全部のあて名を書いてくれた私の父に感謝している。

☆個別支援運動と全体的運動との問題はよく知られるが、概して主体的でないように思われる。どちらにポイントをおくかで論争になるのだが、この論争は個別支援運動にとつては、発展させるより足をひっぱられる場合のことが多い。私は70年前後に比べ運動に関わつていて、政治党派との対抗上、その種の議論には携わっているオだった。それでも支える運動の中で、特に「車指し」にいたる過程で多くのエネルギーを消耗した。幸い宝塚事務局内でのこの種の議論がなかったのだ（他、本性によるものか）。エネルギーを消耗したのだと思ふ。

(了)

「申京煥君を支える会」運動の総括

申京煥君を支える会・事務局

① はじめに

昨年十二月八日、申京煥君に特別在留許可が出て、申君の「強制送還事件」は実に五年ぶりに解決したのである。申君の強制送還をやめさせるために活動してきた支える会の最終のニュース発行に際して、この五年間の歩みを振り返ってみたい。

② 事件の発端

申君が懲役八年の前を五年半に縮減して韓国少年刑務所を出所したのは一九七三年九月の事である。申君はただ家族のことを思い、苦しい刑務所生活を耐えて五年半を出所したが、待っていたのは家塚のアボジ（父）オモ

ニ（母）ではなかった。韓国少年刑務所の前で待っていたのは入管の役人であり、申君はすぐ大村収容所に送られた。

その秋の韓国への送還船のおき日は、十一月二十八日であったが、その十一月の初めのころ大村収容所内で送還希望者が発表された。そこに申君の名前があった。日本に生まれ育った申君が、少年時代に犯した罪の故に、まだ一度も行っていない韓国に強制送還されることになったのである。

申君の家族らが八方手をつくしたがどうにもならず、最後の手段として裁判を起すことになった。訴状を提出したのが十一月十四日、送還の執行を停止する決定が出たのが十一月二十二日、送還船離境の一週間前のことだ

った。この執行停止の決定によりようやく十一月二十八日の送還船に乗せられることを免れたが、それから申君の長い斗争が始まった。

翌一九七四年二月十九日、申君は幸い大村収容所から仮放免され家塚の自宅に戻る。一九七三年八月の逮捕以来実に六年半ぶりのことである。五月間の申君の大村収容所での生活は「無期囚のような……一日ごとに私を魔人化させてゆきました……」というものであった。

申君の処分は「仮放免」で、これには一ヶ月毎（後に三ヶ月毎）に入管に出席すること、活動範囲が制限されること等があった。活動範囲は仮放免当初は、家塚が入管のある神戸市内、次に兵庫県になり、最後には兵庫県および大阪府となった。活動範囲制限のため裁判で東京へ行く度に神戸入管で旅行許可を得なければならず、大阪でタクシーの運転手をしている申君は奈良、京都の宮を築居ることは仮放免条件違反となるのである。

③ 裁判の展開

裁判は七四年一月二十五日から始まった。オモ（父）の公判には（二月二十二日）仮放免された申君も出席した。原告（申京煥）と被告（入管）との違憲審査をやりとりする公判が何回かひらかれるが、その中で七四年七月二日（オモ）の公判で、「退去強制処分」の取消と特別在留許可を求める訴訟に加えて、申君が引続き協定条件許可を得ることを主張する「協定処分取消訴訟」を新たに起した。以降、二つの訴訟が同じ法廷で争われることになった。

七五年九月二十二日のオモ十二回公判より、いよいよ証人調べに入った。オモ十二回は、申君の育て親、朝鮮人部落、ヨシコバで牧師としていた崔昌華氏が申君の少年時代、当時のヨシコバの状況を語った。

オモ十三回の公判は、七六年二月二十七日と二十八日、家塚のヨシコバで出張公判が開かれ、そこで申君のアボジ、オモ三等の話を聞く形になっていたが、その出張裁判は裁判所側の一方的な判断により中止せられた。その理由の一つは、出張裁判の目的であった家塚のヨシ

